音まち千住の縁

http://aaa-senju.com

秋の足音号

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」（通称「音まち」）は、
アートを通じた新たなコミュニケーション（縁）を生み出すことをめざす
市民参加型のアートプロジェクトです。
足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、
「音」をテーマにしたまちなかライブ、ワークショップ、トークイベントなどを展開します。

1　「銭湯哀歌（エレジー）、人情屋台、消えゆく昭和」
～ケント・ダールが歩いた千住～

2-3　わたしたちの日常、あなたのストーリー
フィリピーノたちが経験した日本の暮らし

4-5　友政麻理子とつくる路地裏の映画祭
青春カムバック

6　大巻伸嗣　Memorial Rebirth 千住
今年の会場は…

写真展

「銭湯哀歌（エレジー）、人情屋台、消えゆく昭和」

ケント・ダールが歩いた千住

これは千住に暮らす彼の、そして私たちの記録。
時代が20世紀から21世紀に移り変わってゆくとき、
ある外国人ジャーナリストがこのまちの姿を写し取っていた。
過去～現在～未来の時空を旅する9日間が、今秋訪れる。

30年前、ひとりのデンマーク人ジャーナリストが千住に引っ越してきた。彼の名前は、ケント・ダール。日本での生活をスタートしてから、カメラを片手にまちなかを散歩することが、映画を観るよりも楽しかったという。

今ではほとんど見かけなくなってしまった屋台や、取り壊される銭湯。見覚えのあるまちかど、賑わう呑み屋のカウンター。彼が写した千住の風景には、昭和の面影が残る。それから、すっかり変わってしまったところもあれば、さほど変わらないところもある。「ひとつの足は過去、もうひとつの足は将来に向かっている」と表現するケント。〈現在（いま）〉の積み重ねがいつの間にか過去をつくり、未来はいずれ〈現在（いま）〉になる。当たり前すぎて、普段は忘れてしまいそうなことを、この写真がはっと思い起こさせてくれる。

ケント・ダール

彼は、仕事で世界各地を飛び回りながら、1年の半分以上を千住で過ごしている。パリに住んだ経験もあるというが、このまちの何がケントを惹きつけ続けてきたのだろうか。

たとえば、人。彼が写す人物たちの日常のひとコマには、穏やかな時間の流れが感じられる。そして、古いもの。銭湯や屋台の写真の数々に、ケントの関心が窺える。あるいは、ヨーロッパのまち並みとはまた違う日本の木造の民家も、興味深かったのかもしれない。

ケントはこのように語る。「戦後すぐは、ものが足りなかったし、戦争のこともあまり覚えていたくない。だから昔のものを全部捨てていって、みんなが新しい生活を始めようとしていたのではないか」。一方で、特に若い人たちを中心に、古いものの価値が見直されてきたのではないかという。外国人であるからこそ、時空を超えた日本人の心の機微にも、敏感に気づけるのかもしれない。「ヨーロッパでは結構、古い建物が残っているんです。日本でも、まだ残っているものを未来の人たちに引き継いでいきたいですね」。

ファインダーを覗き、焦点を絞ってシャッターを押す。この瞬間に、彼の視点と世界が詰まっている。何年もかけて、写真展の開催に漕ぎ着けた。ついに10月、数十枚のモノクロの世界から、このまちの記憶がゆっくりと、色鮮やかによみがえる。

写真展の詳細は2面へ

主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科、特定非営利活動法人音まち計画、足立区

音まちかわらばん

音まちで出会う、素敵な人々を紹介します

千住の人紹介 5　田中充（たなか・みつる）
会社員／千住ちんどんの太鼓担当

千住の人紹介 5　やるかやらないか、迷ったら「やる」を選択する

音楽があれば違う世界に行けた

子供時代、親父がすごく厳しかったんです。成績も良く、不良にもなれず、エネルギーを内に向けちゃうタイプだったのですが、音楽があれば違う世界に行けた。ロック系のバンドを組み、楽器はエレキベースを担当していました。卒業のとき、特にやりたいこともなく、何となく就職したのですが、2001年に結婚し妻が出産した。生後まもなく息子が入院したことがあって、病院に会いに行って顔を見たとき、この子のために頑張りたいと心から思ったんです。

若い頃は、サラリーマン的な生き方が嫌いでした。親父の生き方に反発していたのかもしれません。でも自分が父になったのを機にサラリーマンになり、親父と似ている自分に気づいた。意外と気が短く頑固なこと、また、サラリーマンの仕事も想像に反してめちゃめちゃ自分に向いていたことなど。今も働いている電気系の会社は、1万個に及ぶ部品を組み立てるのが仕事なので、情報を丁寧に整理して、段取りをして、数多くの下請け会社や人の動き方を組み立てていく。そういうことが自分は得意なんですね。

そんな2010年、離婚。しばらくは落ち込み、いろいろなことを考えた。家族を持った10年間、自分がやりたいことを抑圧してきたのかなと。それなら何でもやってみようと思って、大友良英さんが水戸芸術館で、アマチュア演奏者を集めてやっていた音の企画に参加した。それを機に、大友さんの千住フライングオーケストラにも加わったのです。千住に来たのは初めてでした。人や企画に惹かれて来たので、場所はどこでも良かった。

ヤッチャイ隊からチンドン隊へ

結婚していたときは新しい人と出会うこともなかったのですが、音まちは職場の仲間とはぜんぜん違って変な人が多くて（笑）面白いんです。少しずつ人間関係ができていって、ちょっと手伝うくらいならいいかなってヤッチャイ隊に入ったんですね。まちなかでのポスター貼りなどを手伝いました。ボランティアなので大きな責任もないけど、行けば喜ばれて楽しかった。でも、ひとつのことにどっぷり浸かるのは嫌で、ずっと一定の距離を置いていたんです。そんな頃、ヤッチャイ隊でやりたいことを聞かれたことがあった。阪神・淡路大震災の後、中川敬というミュージシャンがチンドン形式で被災地出前ライヴをしたのを面白いなあと思っていたので、「チンドン」って言葉を口にした。それをきっかけに自分もチンドン太鼓を作ってみたんです。工作は得意じゃないけど、同じヤッチャイ隊の小日山さんが何でも作ってしまうのを見ていて、やってみようかなって。それから自分がパンマス的に、みんなに声をかけたりして少しずつ、チンドン隊ができていきました。

今のチームでチンドンをやったのは、大巻伸嗣さんの「Memorial Rebirth 千住 2014 太郎山」のときが最初ですね。ヤッチャイ隊として何か宣伝やろうって話になって。それまでは1軒1軒にお願いして回って苦労していたのですが、演奏しながらチラシを配ったらめっちゃハケるんですよ。つたない演奏なのに、みんな笑顔で振り返ってくれて。その後も、音まちに限らず、出動するようになりました。

動かなければ何も起こらない

チンドンだったり、たこテラス(＊)の当番だったり、なんだかんだで毎週千住に来るようになって、葛藤もあるんですけど、何か選択肢があったら僕は「やる」ほうを選択します。動けばそこで何かが起こる。動かないことには何も起こらないから。音まちでは、人との出会い、何かを変えるきっかけがたくさんあった。

僕は地元ではないけど、音まちのやることはいつも気になっていて、音楽とまちとの関わりには興味がある。ミュージシャンって、いろんな場所で演奏し、常に動いていくものなので、チンドンは、そういう音楽の自然な姿のひとつかなと思ったりします。ものごとにはタイミングってあると思うんです。平塚に住んでいますが、音まちを通して知り合った、今のパートナーの動き方によってはそのうちこっち（千住）に来ちゃうかもと思ったり。でもそれじゃ、できすぎた話なので、やはり流れに身を任せるのかな（笑）。

千住は、住んではいないけど、今は仮住まいくらいの感覚にはなっています。千住のまちに対して？「愛」って先に言ってしまってもいいのかなって（笑）。

＊ たこテラス：ヤッチャイ隊の有志が運営する空き家を活用したコミュニティスペース

Profile

高校、大学時代に友人とロックバンドを結成、音楽活動にのめり込む。
2011年から、音まちのボランティアサポーター「ヤッチャイ隊」に参加。
2014年から、音まちメンバーを中心に結成したチンドン隊「千住ちんどん」を率いる。
飄々とした風情で、何事にも無関心を装いながら、熱い内面をもつ人。
現在、平塚に住み、千住まで2時間をかけて通っている。

わたしたちの日常、あなたのストーリー

フィリピーノたちが経験した日本の暮らし

FILIPINOS IN JAPAN

Our Life, Your Narrative.

足立区は東京23区の中でフィリピン人の在住者数が最も多い地域です。
異なる文化で育ち、日本へと暮らしを移した人々は、この社会の日常をどのように経験しているのでしょうか。
音まちでは秋の企画に向けて、梅島の教会に集うフィリピンにルーツを持つ人々にインタビューをおこない、
彼らのライフストーリーを集めています。
その中から4つのテーマで語られたインタビューの一部を紹介します。
彼や彼女の日常が、「わたしたちの日常」になりますように。

アンさんの子育ての話

元ミス・セブ島のアンさんは23歳で来日。
日本人の夫との間に2人の息子を授かったことをきっかけに、
日本語の勉強を始め、学校の活動にも積極的に参加しました。
子供を持つ親ならば必ず引き受けなければならないPTA。
アンさんにとっては――!?

子供がちっちゃいときは、ずっとPTAの役員だったの。自分の子供が一番だから、学校の役員やって、教会のほうでは何のお手伝いもしてなかったの。私、ノーと言えないから、ずーっと役員だったよ！　もう、16年とか。新聞集める廃品回収とか。あと焼きそばとか食べ物つくるの、手伝ったよ。言葉とか大変だったけど、楽しかったよ！　日本人の友達がいっぱいできたよ。ファミレスとかで、家のこととかみんなでしゃべったけど、私は日本語わかんないから聞いてただけ。だから、食べるのに忙しくて！（笑）そうやってお母さんたちで集まったね。日本人の人たちみんな優しかったから、続けられたよ。フィリピン人同士といたらケンカばっかりだったから、日本人の友達いっぱいできてよかったよ。

だから、うち、お客さんすごいよ。子供が幼稚園のときは働いてなかったから、息子の友達がいつも家に来て遊んでた。他のお母さんたちも「アンさん、うちの子供、よろしくね～」って。10人も面倒見るんだよ！　私、みんなの名前ひとりひとり知ってるんだよね。今でも、息子たちの友達、道や駅で「松本くんのお母さん！」って、声かけてくれるの。前はかわいかったのに、顔変わってるから誰かわかんないんだけど、名前を聞くと思い出すね。嬉しいよね。

あと、英語教えてたんだよ。息子が小学校1年生から6年生のあいだ、息子の小学校でね。学校から、「英語を喋るお母さん、ボランティアしませんか」って、手紙きたんだよね。子供と一緒に給食食べて。そのときパートもやってたけど、教える日はシフト休んだね。あるじゃん、いじめ。フィリピン人の友達の子供がいじめられてるって聞いてたけど、私はラッキーだったの。教えに行くとき、「外人だからってバカにしないでよ！」って、私、言うからね！（笑）だから、私の息子は友達がいっぱい。子供大事だから、頑張って教えに行ってたよ。

マイラさんの日本人との思い出の話

聖歌隊メンバーのマイラさんは、ギターと歌が上手なみんなの人気者。
出身はフィリピン中部、南シナ海に浮かぶルバング島。
実はこの島、戦後30年にわたってジャングルに住み続けた
残留日本兵がいた地。40年ほど前、発見されて
日本のメディアを騒がせた記憶のあるかたも多いはずです。
子供だったマイラさんと残留日本兵の遭遇について聞きました。

小野田さんていう人なんですよ。むかし、森の中に30年間、終戦を受け入れずに闘っていたんだよね。「ハポン（日本人）、いるんだって、森の中に」って。私が7歳のときからそういう噂ね、噂だけ最初あって。

私たちが住んでいる山の村なんだけど、いたのよ、人が。それで「あれ、人いたよ！」ってこっちは言うんだけど、向こうはフィリピンの言葉しゃべれないから。

その次は、子供たちで教会を掃除してたとき。掃除終わって、「ご褒美ね」って誰かのお母さんがアイス持ってきてくれたのね。そしたらね、誰かが鐘の下にこう、座ってたの！　葉っぱをかぶってんの。フィリピン人かな思って、「あ、軍いるよ！」って、「ここで隠れてるよ！」って。そしたらその人が、「ちょうだい」って言ったの。それは覚えてる。日本語で、「ちょうだい」って。私たちアイス持ってたからさ、暑かったんじゃない。それで、「え？どこの言葉？ビサヤ語？」って思ってたの。そしたら、誰か、ちっちゃい子がアイスをあげたの。そしたらいなくなっちゃったの。

どうしてそれだけ覚えてるかっていうと、私、日本来たときに、「ちょうだい」っていう言葉が聞こえたの。「あれ？『ちょうだい』？」って。それで、ああ、やっぱりあれは小野田さんだったんだ、って。

小野田さんが見つかるまでに噂が流れて、そしたら日本の政府、軍の偉い人も来て、小野田さんの家族も来て、ジャーナリストたちも来て、いろんな日本人が来たの。で、友達できたんだよ！仲良くしてくれた、通訳の人。私9歳だったの、そのとき。日本に帰ったあと、クリスマスカードとか送ってもらって。バースデーカードとかさ。本当に妹みたいに仲よかったんだよ。

マジュさんの夢の話

教会学校で子供たちをまとめるリーダーを務めるマジュさんは、
現在20歳、看護の専門学校に通っています。
フィリピン人の両親を持ち、
高校生まではフィリピンと日本を行き来して育ちました。
二つの国、異なる文化の狭間で悩みながらたくましく成長する、
マジュさんが描く夢の話を聞きました。

お姉ちゃんが看護の勉強をしていたんです。とても生き生きしてて。それでいろいろ話も聞いて、看護の道に進もう、と思ったんです。実習は大変ですけど、患者さんは大好き。

実は、高校生のときは、人の役に立ちたいと思っていて、看護師か警察官で迷っていたんです。その頃、周りの友達とかに「警察官が向いてるよ！」って言われて、じゃあ、頑張ってみようかなと思って、バイトのあとお父さんと一緒に走り込みしたり、筋トレしてました。でも、いざ警察官になるための資格を調べたら、外国籍の人は警察官になれないことがわかって。その時はムカつきましたね、なんやねん！外国人差別じゃん！って。国籍変えようかなと思ったとき、お母さんが反対して。ああ、じゃあもう看護の道に進もう、って。今はとりあえず日本で働きたいと思ってます。

子供の頃は、将来はフィリピンのために何かしたいって、めっちゃ思ってました。ちっちゃい頃から教会で、貧しい人を助けたりとか、イエス様がやってきたことを聞かされて。だから憧れもあったのかな。自分もそういう人になりたい、みたいな。立派な人のモデルが、イエス様だったから。でも現実、そんなに簡単じゃないってことがわかって、とりあえずお金貯めて貯めて、貯まったら学校とか建てたいなって思ってるんです。あとは、マンション買って、孤児院みたいなとこをつくりたいな、とかも考えてます。で、自分も看護師の資格取っていれば、まあ安心かなって。子供が病気になっても面倒見れるし。料理もするほうだから、ご飯も大丈夫でしょ。でもまだまだ、もっと真剣に考えなきゃって思ってます。

エルマルさん・ジュルファさん夫婦の家族の話

毎週見かける仲良し夫婦。
エルマルさんは仕事のために16歳で来日し、23歳でジュルファさんと結婚。
一人息子を授かり、日本で家庭を築いてきました。
話しかけると、次々ジョークが飛び出してきて笑いっぱなし！
家庭円満の秘訣を聞きました。

エルマルさん　「日本に暮らしていて、ひとつだけ嫌なことがあるとしたら、それは仕事だね。働きすぎて、家族との時間が持てない」

ジュルファさん　「月曜から土曜まで働くし、9時から夜遅くまで働くでしょ。うちに帰ったら、ご飯食べて、シャワーして、もう寝るだけじゃない。家族との時間が全然ないよ」

エルマルさん　「でもやっぱり、家にいても、それぞれゲームとか携帯やっちゃうね。だから、ときどき、テレビも携帯もゲームも禁止っていう日をつくってる。旅行に行ったら部屋にテレビがあるけど、それも見ちゃダメ（笑）」

ジュルファさん　「私がスマホでフェイスブックとか見ちゃうでしょ。そうすると、息子にダメって言われるの。みんなで注意し合うの。フィリピンでは家族が一番大事なの。家族と話す時間大事だよって、日本人に言いたいよ」

ジュルファさん　「息子はチーズが大好きで、地図も大好き！（笑）この子が地図を見て、ここに行きたいって決めるんだよ」

エルマルさん　「この前、親子3人で京都と奈良に行った。電車とバスでね。みんな初めてだったんだよ」

ジュルファさん　「奈良の大仏は大きくて古くてすごかった！」

© 冨田了平

展示、対話そしてパーティーを通して、フィリピーノたちと出会い、彼らの日本での暮らしや文化について知り、考えてみませんか。

イミグレーション・ミュージアム・東京　アートで出会う異文化
「フィリピンからの、ひとりひとり マキララ ―知り、会い、踊る―」　**無料**

構成・演出：阿部初美
映像：冨田了平
会場構成：日本大学 佐藤慎也研究室

「知る」
── 映像展示：Their history, to be our story
日時　平成28年 9月10日(土)，11日(日)，12日(月)
17日(土)，18日(日)，19日(月・祝)
10:00―17:00
会場　仲町の家［東京都足立区千住仲町29-1］
＊地図は7面へ

「会う」
── ワークショップ：なにが気になる？
日時　9月11日(日)，18日(日)
17:00―19:00
会場　仲町の家

「踊る」
── パーティー：フィリパピポ!!
日時　9月17日(土)
18:00―20:00
会場　東京藝術大学 千住キャンパス
第7ホール

千住在住30年のデンマーク人ジャーナリストが記録してきたまちの風景。

イミグレーション・ミュージアム・東京　アートで出会う異文化
写真展「銭湯袁歌（えんか）、人情屋台、消えゆく昭和 ～ケント・ダールが歩いた千住～」　**無料**

日時　平成28年 10月1日(土)，2日(日)，3日(月)，
8日(土)，9日(日)，10日(月・祝)
15日(土)，16日(日)，17日(月)
10:00―17:00
会場　仲町の家［東京都足立区千住仲町29-1］

トーク
ケント・ダール氏：10月1日(土)，16日(日)　14:00―
岩井成昭 × 住友文彦：10月2日(日)　17:00―

写真屋台
日時　10月2日(日)，9日(日)，15日(土)
会場　千住エリア内にて移動展示
＊レトロ撮影会同時開催

昭和歌謡パーティー
日時　10月1日(土)　19:00―
会場　喫茶室サンローゼ
＊詳細は7面へ

仲町の家

企画・監修：岩井成昭
平成28年度　文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業
助成：一般財団法人 YS市庭コミュニティー財団

「千住・縁レジデンス」は昨年度に続き、
アーティスト・友政麻理子がまちの人たちとプロジェクトを続行。
編み出される千住ならではの映画づくり。

自主映画プロジェクトで青春カムバック！

知らない路地の映画祭

題字：針谷明子

参加者が主体となって自主映画を制作した「知らない路地の映画祭」。「場」と「音楽」から生まれた作品の数々を振り返る。

ミリオン通り商店街にかつて、千住唯一の洋画館「ミリオン座」があった。戦後、千住は東宝・東映・松竹・日活・新東宝などの封切館が揃う映画のまちであったのだ。

現在は千住庁舎が建つその場所で、2016年3月11・12・13日、「知らない路地の映画祭」が開催された。アーティストの友政麻理子が発起人となり、市民が参加して自主映画を制作、完成作品を披露する上映会だった。区民広報誌などの募集を見た参加者が秋から準備を始め、紆余曲折ありながらも作品を完成。観客に見てもらえる喜びが、展示会場の装飾にも現れていた。計5回の上映で、短編とはいえ6作品を最後まで引き込まれるように見ている観客の姿が印象的だった。

友政から参加者に最初に提示された条件は二つ。千住の路地を舞台とするが、映画の中に実在の街の名前は入れず、知らない場所として描くこと。既存の映画制作システムを真似るのではなく、映画のつくり方から考えて制作すること。映画づくりに関して知らなくてもいい。映画以外のことから始めて、撮りたいものをどのように撮るかを編み出すことに重きを置いていた。

参加者は、千住の周辺地域からが多く、映画音楽や映画字幕のプロや、映画・映像ワークショップの受講経験者もいれば、知識も経験もないが共同制作に参加してみたいという動機の人もいた。映画制作を通じて母子の時間が持てたり、海外からの移住者が友人たちに音声や照明などを頼んでチームをつくったり、制作プロセスにも千住の地域性が反映されていた。

今回の自主映画は、「場」と「音楽」から生まれたといってもいいだろう。例えば、地域散策で、住宅街の中に小さな五差路を見つけたことから始まった「誤差路」は、人生に希望を見出せなかった女子大生が、異次元に迷い込む中で、化身と出会い、自身を見直していく。「見上げる女」は一人の女性が空を見上げ、何を見ているのか気になった人々が集まるという、パラパラ漫画的なシンプルさが心温まる作品だった。また、「帰り道」は、路頭に迷った男が、見知らぬ他人の「人を信じてみろ」「まっつぐいけ（江戸弁）」という素朴な言葉に救われる。新潟から参加の「Letter & Bread」は、千住のパン屋から発想して、新潟と千住を結ぶストーリーを描いていた。

その多くが、野外で実景を撮影しながら、見えないものひとつの世界を想像させようとしていた。生きづらい現実から異界に一度移り、現実の見え方を変えて戻ってくるという物語。一方、足立で暮らすアーティストのドキュメンタリー映画「小日山拓也の世界」は、それらに対して続きを返しているかのように感じた。周囲の証言を集めて人物を語る手法で、音楽活動および「音まち」を媒介として、身近な自然や人々の営みの中で肩の力を抜いて「暮らし」を守っている。もう一編、猫の気ままな姿を撮った「ジローノウタ」の音楽は秀逸で、映画祭全体を象徴する楽曲にもなっていた。他でも劇伴音楽に救われた作品が多かった。

筆者は、制作過程に何度か居合わせる中で、映画制作自体は現実に対応する反射神経と経験の学びの場だと感じた。撮影場所の許可、小道具の調達、キャスティング、参加者のスケジュールを合わせるのも大変そうだった。電車が何度も通るなどの録音の難しさ、極寒の撮影に体力も奪われた。けれど、撮影許可を取る際にキテンキのエピソードをまちの人から聞き、映像に残されたことなどは、こうした制作過程があったからでもある。完成や上映時には喜びもひとしおで、「人生観が変わった」「映画づくりをしなければ出会えなかった人に出会えた」「次回もまた参加したい」という声も多い。おそらく次回は、既存の映画のシステムを手探りでなぞるというよりも、新しいアイデアを試す機会になるだろう。逆転の発想から何が生まれるか。「知らない」ことの強みがそこにある。

白坂ゆり（アートライター）

1 監督：Jax／脚本：阿部吉光・シビル・レジョリ（Sibylle Le Jolly）
出演：森本菜穂 ほか
上演時間：13分30秒

胸に鬱屈したものを持つ女子大生。
人生に希望を見出せず、悲観していると、なぜか異次元空間を呼び寄せてしまい、
この世とあの世の境目をさまようはめに。
そこに現れた人々の言葉から、彼女がつかんだものとは――。
香港出身の監督が描く現代の奇想譚。

2 監督・脚本：松岡亮一／音楽：カワシマヨウコ
出演：百瀬崇 ほか
上演時間：12分46秒

「私はただ、家に帰りたかった」――。
男は帰り道を探し、路地をさまよい歩く。
だが、歩いても歩いても同じ路地にたどり着いてしまう。
その原因は何か。そして男がたどり着いた先にはいったい何が――。
新たなスタイルのロードムービー。

3 監督：杉浦啓之／脚本：阿部吉光
音楽：カワシマヨウコ・小日山拓也／出演：堀素美子 ほか
上演時間：11分16秒

空を見上げる女がいる。何かに魅せられたようにずっと見上げている。
その姿に興味を持った人々が集まり、女と同じ方角に視線を向ける。
だが、女が空を見上げている理由はわからない。
そしてついに女がその答えを告げると――。
ハートフルなエッセンスが詰まった傑作。

4 監督・脚本：平岩史行／撮影：新木庸平（新潟）・杉浦啓之（千住）
出演：中村拓哉 ほか
上演時間：13分06秒
［「潟の夢映画祭」（新潟）と「知らない路地の映画祭」の共同制作］

一緒に暮らすマモルとハルナ。だがある日、ハルナは姿を消した。
ハルナが好きだったパン屋の店主から渡された一通の手紙。
そこにはハルナの思いがつづられていた。そしてマモルが取った行動とは――。
新潟と東京を結ぶ、さわやかなラブロマンス。

5 監督・音楽・撮影：岡野勇仁／出演：小日山拓也 ほか
ナレーション：胡舟ヒフミ／編集・整音：moriken ほか
上演時間：36分39秒

「あいつは変態だよ」「彼は天才よ」「僕の師匠ですね」――。
希代のアーティスト小日山拓也を知る人はこう語る。
音楽を奏で、絵を描き、周りの人々に勇気を与える小日山。
人と土地とのつながりをテーマにし、
彼の人生にせまる心あたたまるドキュメンタリー。

6 監督：杉浦啓之
音楽：カワシマヨウコ
上演時間：2分42秒

路地といえば、猫。
路地裏に住むジロー（猫）が路地をジロジロ、
まちや人を観察している様子を歌にした。
幼児や女子高生、お母さんたちが初めてレコーディングに挑戦。
子供から大人まで、親しみやすく、口ずさめる曲と映像が生まれた。

NEW!

千住・縁レジデンス　友政麻理子
自主映画制作プロジェクト 2016 参加説明会

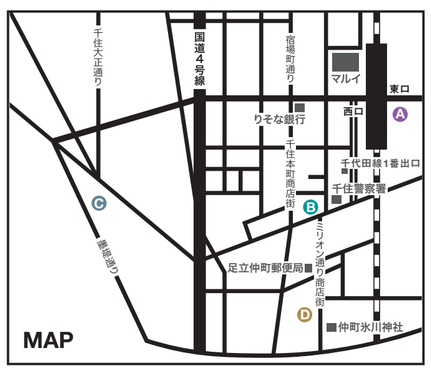
日　時　平成28年8月27日（土）14:00―15:30［終了後、交流会有］
会　場　東京藝術大学 千住キャンパス［東京都足立区千住1-25-1］
料　金　無料（事前申込優先）
申込先　電話またはWEBから

今年も映画撮影を始めます。
みなさん参加してくださいね。

アーティスト紹介

友政麻理子　ともまさ まりこ

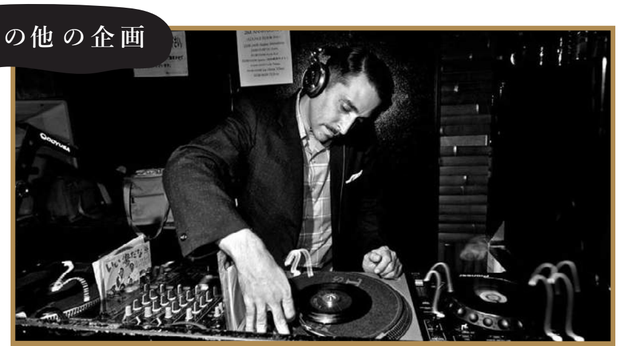
1981年、埼玉県生まれ。2015年「水と土の芸術祭2015」（新潟市）、「あざみ野コンテンポラリー vol.6もう一つの選択」（横浜市民ギャラリーあざみ野）などに参加。コミュニケーションの過程に起こる出来事をテーマに、映像作品などを国内外で発表。



A	昭和歌謡パーティー	喫茶室サンローゼ
B	野村誠　千住だじゃれ音楽祭	東京藝術大学 千住キャンパス
C	大巻伸嗣 Memorial Rebirth千住 2016 青葉	千寿青葉中学校
D	マキララ ー知り、会い、踊るー 銭湯哀歌、人情屋台、消えゆく昭和	仲町の家

【お問い合わせ】「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」事務局
WEB　http://aaa-senju.com/contact
電話　03-6806-1740（13:00－18:00、火曜・木曜除く）
メール　info@aaa-senju.com
住所　〒120-0034 東京都足立区千住 5-13-5 学びピア21 7階
＊プログラム内容は変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

その他の企画



「昭和歌謡 パーティー」
アメリカ人DJによるクラブイベント

写真展オープニングに合わせ、近年外国人にも人気の高い昭和歌謡を専門にする
DJ Dandy と DJ Marie Kimishima によるイベントを開催します！
世代を超えて耳に馴染む音楽を、北千住駅前のマンモス喫茶で写真とともに味わいませんか。

日　時　平成28年10月1日（土）19:00－
出　演　DJ Dandy・DJ Marie Kimishima
料　金　入場無料（飲食は別途有料）［先着50名］
会　場　喫茶室サンローゼ（東京都足立区千住旭町3-5）
アクセス　北千住駅（東口）駅前すぐ

野村誠「千住だじゃれ音楽祭」
プレイベント 開催決定

積極的に海外交流も行う、「だじゃれ音楽研究会」。
2016年は、さらにメンバーを増やすべく、2月の音楽祭に先駆けてプレイベントを開催します。
これを機に、あなたもだじゃ研の仲間入り!?
まずは一度、生でだじゃれの音楽に触れてみてください。

日　時　平成28年10月22日（土）
料　金　無料［事前申込可能］
会　場　東京藝術大学 千住キャンパス（東京都足立区千住1-25-1）
アクセス　北千住駅（西口）より徒歩約5分

アサダワタル「千住タウンレーベル」
新プロジェクト 立ち上げ中！

昨夏、千住にて子供たちとラジオ番組づくりのワークショップを開催した
アサダワタルが、「千住タウンレーベル」を立ち上げ。
「まち」と「音」をテーマに、参加者と新しい記憶のメディアをつくっていきます。
今秋には参加説明会を実地します。
どうぞ、ご期待ください。
＊詳細は、追って音まちwebサイトに掲載します。

大巻伸嗣
Memorial Rebirth 千住 2016 青葉
メモリアル・リバース

「メモリバ」の愛称で親しまれるMemorial Rebirthの季節が今年もやってくる。
10月9日（日）、千寿青葉中学校での開催が決まり、さらなる広がりを見せる。

日　時　平成28年10月9日（日）［小雨決行］
昼の部 15:00―／夜の部 18:00―（各回30分程度）
料　金　無料（申込不要）
会　場　足立区立千寿青葉中学校［東京都足立区千住宮元町27-6］

6年目のメモリバ、今年は千寿青葉中で開催。
――いよいよ中学生も企画参加!?

この5年間、地域から地域へとバトンのように引き継がれてきた千住の「メモリバ」。無数のシャボン玉で、見慣れたまちを光の風景に変貌させ、記憶を呼び起こし、新たな記憶を刻んできた。昨年、足立市場でひとつの大団円を迎え、今年は転換期に入る。新たな縁を紡ぎながら、まだ見たことのない景色へとまちをいざなう。

6月、アーティストの大巻伸嗣を囲み、今年度のキックオフミーティングが開かれた。シャボン玉マシン担当から、「しゃボンおどり」の音楽や衣装、踊り手まで、さまざまな立場から関わるメンバーが集い、これまでの歩みをともに振り返った。その場で、決意も新たに、初めて区内中学校で開催する意向を固めた。会場となる千寿青葉中学校の在校生には、2011年度に音まちで初開催した「千住いろは通り」のメモリバを、当時小学生として見に来てくれた生徒たちがいるそうだ。少し成長した彼らと、少し進化したメモリバが再会するチャンスとなる。

千住のメモリバは、シャボン玉マシンを預かる市民と東京電機大学の有志によるテクニカルチーム「大巻電機K.K」に支えられている。その総監督を務める安喰悦久さんは「ぜひ青葉中の生徒さんたちにも、企画から参加してもらいたい。彼らの思いをのせたメモリバになれば」と期待を寄せる。また、同チームのリーダーで、青葉中「おやじ・おふくろの会」会長でもある寺澤昌記さんも「思い出深まる『メモリアル』なものになるはず」と前向きに語る。

大巻は、「メモリバが、地域を越えて手渡される、現代版の御輿のような役割を担ってほしい」という。これまでの5年間で、点在していた縁は線でつながり、ひとつの環に。メモリバの象徴である「シャボン」にかけた「しゃボンおどり」では、まちの言葉で編まれた歌詞に、大編成の「音楽隊」が旋律を奏でる。シャボン玉の光のなか、華やかな衣装をまとった「踊り連」の方々や「踊り手モデル」たちによって、「歌い手」とともに彩られる風景は、千住の風物詩になりつつある。

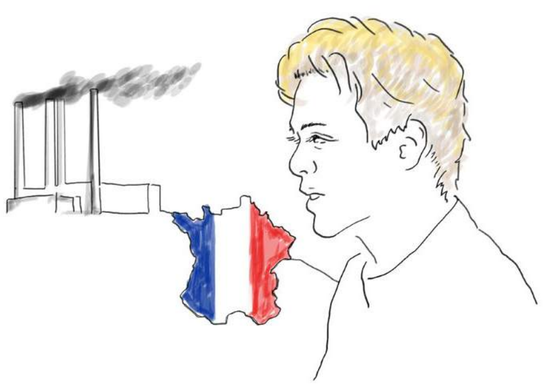
音まちでは、こうした関わりの次のステップとして、次にメモリバを迎え入れてくれる区内の市民パートナーの募集も始める予定だ。次は、あなたのまちにメモリバがやってくるかもしれない。

しゃボンおどり盛り上げ隊 大募集！

メモリバオリジナルの盆踊り「しゃボンおどり」をマスター。
当日は、お客さんのお手本になる「踊り手モデル」や、
踊りの輪に促す「促し隊」となって、
一緒にメモリバを盛り上げよう！
衣装づくりや、地域のお祭りにも参加します。
＊詳細は音まちwebサイトをご覧ください。

千住・縁レジデンス 2015年度 アーティスト

久保ガエタン 躍進中



今年1月23日から3月13日まで、たこテラスにて開催した展覧会、久保ガエタン「記憶の遠近法」。かつて千住のシンボルとしてそびえ立っていた「お化け煙突」を中心に、このまちの人々の記憶がまるで輪廻するかのような展示を行った。そしてこの展示がまた輪廻し、別の場所で新たな作品に結びついた！

都内文化施設、NTTインターコミュニケーション・センター「ICC」で、8月6日まで「エマージェンシーズ！028」にて久保のインスタレーション「破壊始建設／Research & Destroy」が紹介された。千住で過ごした時間が、彼の中に「リサーチ」という新しい作品制作の手法として息づいているのかもしれない。

今年は東京にて個展を開催予定、そして、来年2月からはポーラ美術振興財団在外研修員としてフランスで研修を予定している。自らのルーツのひとつである、ボルドーほか、パリを拠点に制作を展開していくという。

海を渡って、ますます精力的に制作が続いてくことを千住から追いかけたい。